

平成 22 年 5 月 7 日現在

研究種目：学術創成研究費

研究期間：2007 ~ 2011

課題番号：19GS0101

研究課題名（和文） 総合社会科学としての社会・経済における障害の研究

研究課題名（英文） A study on disability in a socio-economic context:  
toward a unified social science

研究代表者

松井 彰彦 (MATSUI AKIHIKO)

東京大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：30272165

研究代表者の専門分野：理論経済学・ゲーム理論

科研費の分科・細目：経済学・理論経済学

キーワード：ゲーム理論・計量経済学・障害学・障害の経済学

## 1. 研究計画の概要

本研究は、1990年代から日本において新しい動きを見せている障害学を、経済学、とくにゲーム理論と結びつけ、総合社会科学としての社会・経済における障害の研究という新分野を構築することを目的としている。

研究の方法として、全体の研究を5つの分析グループに分け、それぞれに核となる研究者を配置している。各グループを有機的に関連させるため、1~2ヶ月に一度の全体会合を通じて、意見交換をしている。

**制度分析グループ：** 国連の障害者権利条約の国内法へのインパクト等を内閣府の障害者制度改革推進会議の動きをリアルタイムで追いつつ、分析している。

**事例・実験分析グループ：** 重複障害、女性障害者、顔にあざのある人々といった制度の狭間に落ち込む人々の事例研究をしている。「声」の効果の実験も行った。

**計量（実証）分析グループ：** 国内調査では1000部強の調査票を回収した。回収率は57%に達した。長期疾病者の経済調査を行った。

**歴史分析グループ：** 「近代化」のなかで「障害者」が生み出される歴史的過程を分析。

**理論分析グループ：** 帰納論的ゲーム理論、量子論的ゲーム理論など、ゲーム理論の最先端を開拓しながら研究を進めている。障害の社会理論の構築を行いつつある。

## 2. 研究の進捗状況

プロジェクト開始早々に得られた最大の知見は、「障害」の広がりや外延を研究することの必要性の再認識であった。一言でこの問題を表せば、われわれは何をもって、「だれを『障害者』と呼ぶのか」という問いへの答

えを模索しなければ、障害問題は読み解くことができない、ということである。

とくに小さな声しか出せない者たちは、健全者のための制度と「障害者」のための制度の狭間に落ち込んでしまい、光が当たらないという点に着目し、重複障害、女性障害者、顔にあざのある「ユニークフェイス」の研究に重点を置き、この点を明らかにした。

東京大学医科学研究所と共同で慢性骨髄性白血病患者の経済調査にも着手し、650の調査票を得た（回収率50%超）。これによって、障害者と長期疾病者の垣根の問題が浮き彫りになった。

人々の意見を集約して「障害」の定義を与えることは不可能であることが理論的に示された。観察者が観察することで状態が変わるという問題に量子論の観点から取り組んだ。

イギリス・アメリカ・ドイツ・日本といった国の歴史資料を解読し、「障害」概念の形成・普及・変容の実態を解明した。

もう一点、大きな成果は統計調査である。本研究課題で実施している統計調査は、経済と障害に着目し、特定障害種別に偏らず、標本数、回収率も計量分析に耐え得るという点をすべて兼ねている点で、日本国内では初めての試みである。また、海外でも、近年、ここまでの規模の統計調査は行われていない。集計表の作成と統計解析により、これまで、数量的に明確にされてこなかった障害児・者とその家族の社会的困難などについて、定量的な結果が得られることが期待される。

これに先んじて、実証分析では、ネパールのデータを用いて、教育の収益率を計測し、健全者に比して障害者への教育投資の効率

が有意に高いという結果が得られた。

### 3. 現在までの達成度

当初の計画以上に進展している。

[理由]

(1) 研究の Scope を狭義の障害者から広義の障害者へと広げることができたことが第1の理由である。

当初予定の障害者手帳保持者を中心とした狭義の障害者が直面する社会的バリア等に係る研究に加え、制度の狭間に落ち込んでいる人々(広義の障害者)にまで研究の Scope を伸ばすことができた。盲ろう、女性障害者、ユニーク・フェイスといった従来の障害者施策では置き去りにされている研究分野の進捗を特筆したい。

(2) 統計調査が、調査対象を広げたのにもかかわらずほぼ予定通りのペースで進んでいることが第2の理由である。また、医療関係者と共同で長期疾病者の調査ができたことも大きな成果である。

(3) 理論面で新機軸の研究が芽を出し始めたことが第3の理由である。

当初予定されていた帰納論的ゲーム理論や障害の社会理論だけでなく、社会選択論を応用した障害区分の不決定性、認識が状況を左右する量子論的ゲーム理論の研究結果、チャネル理論を用いた認識論の枠組みの構築など、さまざまな理論研究が花開いた。

(4) 次代を担う研究者の育成につながったことが第4の理由である。

(5) 最終年度に行う予定だった海外での成果発表を3年目の初頭に成し遂げたことが第5の理由である。

### 4. 今後の研究の推進方策

ネパールとフィリピンを対象に海外調査を行う。得られた統計データを元に計量分析を行う。各グループの研究をさらに進展させる。22年度に最低2冊、23年度に最低1冊の研究成果を刊行する。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

Toshiji Kawagoe and Akihiko Matsui, "Economics, Game Theory and Disability Studies: Toward a Fertile Dialogue", forthcoming in A. Azzopardi and S. Grech eds, *Inclusive Communities: A Reader*, 2010. 査読有

Yohei Sekiguchi, Kiri Sakahara and Takashi Sato, "Uniqueness of Nash equilibria in a quantum Cournot duopoly game", *Journal of Physics A: Mathematical*

and Theoretical, 43, 145303, 2010. 査読有

金子能宏「障害者福祉施策の経済効果」『季刊社会保障研究』第44巻第2号, 212-223頁, 2008年, 査読無

松井彰彦, 「経済学・ゲーム理論と障害」, 『障害学研究』(明石書店), 第4号, 8-33頁, 2008年. 査読有

川越敏司, 「経済学と障害学は対話できるか?」, 『障害学研究』(明石書店), 第4号, 33-62頁, 2008年. 査読有

[学会発表](計 5件)

Ryoko Morozumi, "The Employment Rate of the Graduates from High Schools for the Physically Disabled, Intellectually Disabled, and Seriously Diseased", presented at 2009 Far East and South Asia Meeting of the Econometric Society, Aug. 3-5, 2009.

Kamal Lamichhane and Yasuyuki Sawada, "Disability and Returns to Education in a Developing Country", presented at the same meeting as above.

Soya Mori, "How Do Persons with Disabilities Earn a Living?: Findings from the Field Survey Conducted in Metro Manila, the Philippines", presented at the same meeting as above.

Yohei Sekiguchi, "Compensation and Responsibility: General Impossibilities and Possibilities", presented at the same meeting as above.

Satoshi Fukushima, "The Deafblind and Disability Studies", presented at Todai Forum at Manchester Metropolitan Univ. Apr. 30, 2009.

[図書](計 4件)

田中恵美子, 『障害者の「自立生活」と生活の資源』, 生活書院, 2009

西倉実季, 『顔にあざのある女性たち「問題経験の語り」の社会学』, 生活書院, 2009年(山川菊栄賞)

西倉実季, 桜井厚・山田富秋・藤井泰編, 「日常生活を導くナラティブ・コミュニティのルール 顔にあざのある娘を持つ母親のストーリー」, 『過去を忘れない 語り継ぐ経験の社会学』, せりか書房, 157-174頁, 2008年

福島智, 「障害学」, 『アカデミック・グループ』, 東京大学出版会, 20-21頁, 2008年

[その他]

ホームページ

<http://www.read.tu.jp/>